

新圖」があり、殊に後者は年々新版が出てゐるので、支那地圖の最も尖端を行く者である。しかし支那及び滿洲國の全疆域を収めた一枚刷の圖としては從來殆んど完全なるものを入れる事が出来なかつた。本圖はかかる需要に應ずるものとしても最適の者といふべく、昨年支那事變の勃發以來頻出せる坊間の支那全圖とは根本的に異なる。四百萬分一の縮尺を採用した事は印刷技術の關係にもよることながら、中華民國及び滿洲國の縣城の分布を漏れなく記載し得ること、圖上の一耗が略々我が國の一里に相當すること等の理由による。殊に後者の如きは地圖の使用上案外の便利を蒙るのである。更に本圖の特色は現在の縣城をもととして、清朝末期にまで遡り府廳州縣の別を圖上に示してゐる點であつて、之に依て當時の行政上の中心、ひいては現在の縣城の廣さや城壁の大きさを察する手掛りともならう。此等の事については、いづれ、近い中に出版される本圖の索引に詳細な説明が附される筈である。支那及び滿洲國に於ては縣城以上を表示することに意を用ひた爲、縣以下の小地名に於ては相當重要なものを併してゐる缺點がないでもない。縣名は民國二十三年が基準となつてゐるが、もとより滿洲國は最近の制により、支那に於ても出来る限り新設の縣が附加されてゐる。しかし脱漏は免れる所ではなく、鐵道はもとより河川に於ても往々にして誤を認める。文字の正確は最も意を用ひたのであるが、之さへ既に幾つかの誤を發見した。此等は是非再版の際に改訂したいと思ふ。(軸製特價六圓、折圖壹圓八拾錢、昭和十二年十一月、東京富山房發行)〔日比野〕

## ○ルネサンス文化の研究

大類 仲

昭和七年に東北大學から雜誌「西洋史研究」が創刊せられて以來既に六年の歲月が經つた。此の六年間ほど吾々が人類博士をば吾が學界の輝やける存在として意識したことはなかつた。博士の年と共に益々々しい熱情のもとに「日本における西洋史學」が何となく軌道に乗つて來たといふ力強さを感じたものは私一人ではないであらう。戦後における歐洲史學の轉回——それは歐羅巴的危機の地盤における未曾有の轉回であつた——は人類博士といふ鋭いレンズを通して仙臺から全日本に向つて反射されつゝあつたといつても過言ではないであらう。

如何に鼻原目に見ても今までの吾が邦の西洋史學には未だ獨立の發展をとげるだけの地盤を缺いてゐる、而も如何に卓れた獨創的研究でもそれが強靱な地盤によつて支へられてゐなければ充分に fruitful であり得ないのである。明治以來數十年の歴史を有する吾が西洋史學が何故に歲月に相應した生長發展をとげないのであらうか、専門家自身が研究上の地理的不便を常套語とするやうでは餘りに無責任すぎるやうに私には思はれる。尠くとも歴史の如き學問が狹隘な翻譯階級の間だけに特權の如く保たれて一般の教養の中に充分に溶解されてゐないといふことは決して健全な状態とは謂はれない。而も之までのやうに學の水準とは凡そ關はるところのない低俗な常識的參考書類が屋上屋を架して出現するの

では吾々の期待は何時まで経つても満たされないのであらう。學者の怠慢の罪であらうか、それとも有爲な學者が通俗を蔑つて却つて通俗人に見棄てられたのであらうか、一考を要する問題でなくてはならぬ。

この様な状態の下において、大類博士の、問題の取り上げ方や批判の角度において嘗てピントの外れたことのない感光度の鋭さは吾々後進にとつて誠に意義深きものであつた。のみならず博士自身の比較的多作な學的生涯にとつても、此の十年間は最も眼見しき勞作期であつたと考へられる。従つて最近十年間の博士の勞作を集成した近著「ルネサンス文化の研究」はこれまでの博士のどの著述よりも重要視せらるべき理由をもつと謂はなければならぬ。

十餘年前「西洋中世の文化」が公にされて以來世間は一般に博士をば中世史家と考へてゐるやうである。勿論中世に對する博士の造詣については今更誰も異論のある筈はないが、唯然し最近十年間における博士の關心は常に一つの明瞭な中心を繞つて回轉してゐた、それは中世ではなくてルネサンスであつたのである。従つて偶々中世の問題を取上げた場合においても、例へば本書に納められた「ゴティックの問題」「ゴティックの克復」などの諸篇がそれを示してゐるやうに常にそれがルネサンスの角度から取扱はれてゐた。吾々の眼に映つた近來の博士は明らかに medievalism ではなくてルネサンス史家であつた。そのことは博士のルネサンス觀の根柢が humanism であることによつても一層明らかである。全

篇を通してイタリヤ的なるものに對する特殊認識が博士のルネサンス觀の特徴をなしてゐる。イタリヤの理解者であるといふことゝルネサンス學者であるといふことゝが、ブルクハルトにおける場合の如く博士の場合においても不可分離の關係をなしてゐる。

このことは學說の新舊を超えて凡そルネサンス學者の orthodox といふ他はない。近時のフイチンガの研究の如きものに對して、その成果を充分に評價しつゝも根本觀念において結局追従し得ないことも、博士として止まるべきところに止まつたといふ他はない。

然し博士としても歴史家である以上、ルネサンス現象の形態的把握に甘んじ得ないのは當然である。ルネサンスをば動的、發展的に把握せんとする態度、即ちルネサンスの起源に對する考慮、中世とルネサンスとの關係、ルネサンスの種々なる發展段階に對する考察、ルネサンスと近代文化、殊にバロックとの様式的關係に對する考慮は全篇中の隨所に散見してゐる。のみならず第六篇「ルネサンスの先驅者コラ・ゼリエント」第七篇「ルネサンス初期における羅馬復活の思想」第八篇「ダンテの羅馬思想」などの諸篇は「ゴティックの問題」「ゴティックの克復」と共に、以上のやうな關心から特に中世とルネサンスとの交錯推移の關係を解かんとするものと見做される。唯そのモチーフにおいて septentrionalism と行き方を異にするところあるのは上に述べた humanism なる博士の立場として必然の歸結といふべきであらう。

抑、ルネサンスとは何であるか、之に對する解答はブルクハルト

ト以來半世紀を経た今日においても吾々は未だ止まるべきところに置かれてゐない。否今日において學者の見解は益々動搖し始めたといふはなげなればならぬ。ルネサンスの源泉は古典古代であらうか、それとも基督教的中世であらうか、古代の影響はルネサンスにとつて第一義的であるか或は第二義的であるか、古典模倣はルネサンス末期における退行的現象であり却つて新精神の發展を抑止したのではないだらうか、ルネサンスは「人間と自然との發見」であるといはれる、然し自然主義現實主義がルネサンスの本質であらうか、却つて現實の克復、完盛美への追従、超時代的な絶對完全を求めた盛期ルネサンスの理想主義にこそ眞のルネサンスがあるのではないだらうか。抑、ルネサンス概念が單義的でないことは、動もすればルネサンスが一つの共通の本質によつて強調されるに不拘、實は多様な事象の複合異つた流れの混流であるといふことに基いてゐる。ルネサンスは一つの時代でなく多くの異つた段階を含んでゐる。ブルクハルトの根本的な缺陷は本書の第十五篇にも指摘されてゐるやうに、典型の把握に終つて段階認識を有たない點にある、彼以後における歴史研究の重心が此の點におかれるのは極めて當然と謂はなければならぬ。以上のやうな諸問題を取扱つた第二篇「ルネサンスの概念」は本書の中でも特に重きを置かれるべき一篇といふべきであらう。

著者のもつ獨創性といふ點においては或は他の——例へば第八篇「ダンテの羅馬思想」の如き——傑作を推すべきであるかも知れないが、然し本篇は今の學界において最も痛切に問はれてゐる問

題が博士の如き權威者によつて立言されたといふ點に多大の意味を有してゐると思はれる。たゞ本篇を通じ博士の據られる立場が稍微底性に乏しく折衷的な力の弱さを感じさせられる。然し此事は却つて現在におけるルネサンス觀の動搖狀態を反映するものと見るべきかも知れない。實際現在の狀態において問題の解決といふことは要求すべからざることである。今の學界にとつては solution よりも却つて formulation) が必要であるばかりでなく學問的なのではないかと思はれるのである。

卷末に加へられた「ブルクハルトの伊太利ルネサンス文化を讀む」の一篇は小篇乍らブルクハルト文獻中の重要な一つに數へらるべきものであると共に、大類博士の人と學風を理解する上にも格好の讀物で、吾々はブルクハルトを通して語られた博士自身の獨白を聞き博士自身の憧憬と苦惱とを讀み取ることが出来るやうな氣持がする。ブルクハルトが自由の所産たる文化を標榜し乍らも力の所産である國家や戰爭に對する是認をもつたことは吾々にとつて極めて興味深い問題でなくてはならぬ。ブルクハルトにおける豐潤な矛盾であつた歴史家的なるものと藝術家的なるものとの鬭争は大類博士においても是を見る事ができる。「ゴッティエの克復」の中における動的史觀と靜的史觀の問題も、それは現代史學の問題であると同時に博士の學的苦惱のドキュメントとも見ることができよう。蓋し單純素樸な發生史觀に安易な據點を見出し得ない惱みにこそ博士の眞の偉大さがあるのでないか。所詮博士は Realism を見詰めるべき歴史家であり乍ら常に藝術をは故郷と

東京、三省堂發行) (鈴木)

し必然の世界に住み乍ら理想を求めずにはゐられない人でなからうか。「ラファエロの聖母畫」、「アルベルティの繪畫論」の如きも博士の斯様な半面を示すものといふべきであらう。「ゴッテットの問題」の如きもその中に様式論のやうな基礎的問題が取上られてゐる點で特殊専門家の評價に止まるべきものと思はれないが既に紹介の紙面も盡きたので割愛しなくてはならぬ。

唯最後に一言讀後の所感を述べることを許して貰ひ度い。それは本書が夫々に獨立の主題をもつた論文の集成であつて體系的敘述でないといふことに對する不満である。勿論排列された各篇相互の間に一應の關聯が認められぬではないが、各篇相互のつながりが論理的必然性をもつてゐない、各篇の内容を結び合せて一つの纏つた印象に到達するかといふに必ずしもそうではなく、一體に全篇を通じての統一が稀薄で構成的でないことは前に擧げた著者の立場の論理的徹底性を缺くことと共に吾々にとつては物足りない點といはねばならない。卷頭に掲げられた「ルネサンス時代概觀」の一篇は恐らくそれを補ふ趣旨のものかと想像されるが、その餘りにも平板低調な記述は却つて後續諸篇の眞價を傷ける虞なしとしない。固より體系的記述は輕卒に要求せらるべきものではない。一小篇と雖もその含蓄あるものは徒らに老大粗雑な體系に勝ることは斷るまでもない。唯吾邦においてよく之を成し遂げ得る人が博士を措いて他に求め難いことを思へば、吾々の不遜な要求も恕せらるべきであらう。博士にして健在なる限り吾々は之を明日に期待して差支ないと信するのである。(菊版、定價金六圓)

本書はライプツィヒの Felix Meiner Verlag 刊行の「科學と時代精神」叢書の第八輯として公刊されたものであり、僅々五十頁に満たない小冊子にすぎないのであるが、併しその副題が示してゐるやうに、マイネッケがさきに發表した大著「歴史主義の成立」(本誌、第二二卷・第二號紹介欄参照)の續編をなすものであつて、此の問題に對する彼の研究のその後の進展を廣く學界に告げるものとして注目さるべき充分の意義を有つものであらう。すでに前著に於いて、彼の所謂歴史主義の成立期に於けるドイツの偉大な思想家・詩人達の思想が Individualität 及びその Unersetzlichkeit, Eigenheitlichkeit の思想の生長に對してどのやうに意義づけられるべきかを考へたマイネッケは、今本書に於いて更に一步を進めて此の考察をフリードリヒ・シラーに向けやうとするのである。さきには、レッシング及びヴィンケルマン、メーゼル、ヘルデル、ゲーテが彼の思索の照明を浴びた。今度は、シラーをその同じ舞臺に登場させやうと云ふのである。

シラーの思想の發展が、通常説かれる如く、もしも三つの時期——即ち未だカント哲學の影響を受けない第一期、次にカントの影